

藤岡啓介の翻訳玉手箱 第3篇
公開講座 プロになるぞ！！ 第12回
コメント一覧

『江戸文学問わず語り』

彼女の教養を独特の文章で語っていて、これは小説ではなかった。

ピュシーノさん

ピュシーノさんにトロロープ自伝の序文から翻訳してみたら、とっておいたけど、このトロロープさんのお母さんが大変な女傑で作家だった。息子の文章に女流の雰囲気があるかもしれない。くどいほど丁寧なところがあるでしょう？

私に

「私に」は邪魔だな。

私が気づいてしまって申し訳ないと思うような、

as I was sorry to notice,は挿入節。「眼にするのも気の毒な」というニュアンスで。

自らこの初対面の人物を私に紹介し、

ゴテついているな。

射返されたのだ

なんだかコチコチだな。漢語をひらいて書くと、原文と同じような分量になるよ。ぼくのいう「等価等量」の翻訳を工夫するように。

なんとも痛ましい親子のやり取りに思えた。

挿入節としないで訳してみました。原文は父親に対して「気の毒」といっていますが、あえて「親子」として異様な食卓の風景を表しました。

formally

「正式に」は野暮だな。

私が結婚をして親戚になった若者

なんとかならないかな？とコメントしたけど、辞書を見るとhis[her] uncle by marriage 妻(夫)おじ(リーダーズ)、つまり自分の結婚によって生じた縁故関係の〇〇というのですね。ピュシーノさんの訳がよかった。

ジャゴー氏と知り合いになってくれないかね

おかしな言い方だな。

家内の方の親戚でルフランク君だ

いいぞ！

場所を変えてゆっくりと休むために
転地、静養、が浮かんでこなければ。

家内の縁者

日本語ではおかしな言い方。「父方、母方」という言葉はあるけど、「妻方」「配偶者方」はないですね。上のビュシーノ訳でいいのだけど、あえて。

drew back from

こうした言葉、意外と難しいですね。「身を引く」ですが、ここでは「避ける」も通用すのではないかな。

the man with the beard

さあ、うまく訳したいな。「あご髭男」では文章に品がないかな。では文体を考えてみたら？というのが翻訳の勉強だな。

父親からはとても気に入られているけれども

この日本語の語法、まわりくどいね。父親から、でなく、父親の、と発想してごらん。

そのためにか、または別の理由で

そうなんだよ、困ったな、もつと的確にあっさり行きたいな。

Was the young lady Naomi Colebrook?

平坦に中学校の教科書のつもりで訳さないで。末尾のat last!も。

ひとりの

要らなかった。

あらわれたのだ

ここは、動詞を漢字で書くと迫力が伝わるな。

若い女性が

これでいいのだけど「若い女性が(.....静かに加わった)」というのが、訳文として頼りなく感じますね。といって「ひとりの若い女性が」も変だし。悩みますね。藤岡訳では「この娘こそ」と受けて落ち着かせました。